

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 川村大



学位申請者 李 丹

論文名 「二格の名詞と動詞からなる連語について」

【審査の結果】

本論文は、従来重要性が指摘されながらほとんど放置されていた奥田靖雄「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」（1962）の再検討を図った意欲的な論文である。数千例の実例の収集・分類をとおして奥田の指摘しなかった類型をいくつか新設し、また、類型間の移行・派生の例を詳細に検討することによって、「存在物のありか」から「社会的なかかわり」等までの相関を一覧として示すことに成功した。本論文の成功の一部は、奥田の連語論から一步文論の次元に踏み出したことによるが、著者はこの事に十分自覚的である。問題点も無くはないが、総体として学史的意義の十分に認められる堅実な論考である。よって審査委員全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。

なお、審査委員会は川村大を主査とし、本学の早津恵美子教授・成田節教授・三宅登之教授、学外の前田直子教授（学習院大学・日本語学）を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

「連語論」とは、奥田靖雄氏を中心とする言語学研究会（いわゆる教科研グループ）が提唱した研究領域で、〈ヲ格の名詞＋動詞〉など、2つ以上の語の文法的な組み合わせの型（これを「連語」という）を積極的な「名づけの単位」（つまり、語や文とともに意味を担う単位）として認め、個々の連語の設定並びに体系化を目指すもので、その成果は『日本語文法・連語論（資料編）』（むぎ書房1983。以下『資料編』）所収論文その他として公表されている。中でも奥田氏の「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（『資料編』所収）は連語論の最も代表的な成果であるとともに、連語論の枠組みを超えて、今日も動詞文研究において参照される基礎文献となっている。それに対して、同じく奥田氏のまとめた「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」（初出1962。『資料編』所収）は、各所に重要な指摘を含みながらも積極的な再検討を受けることなく、ほぼ放置されていた観がある。

本論文は、その奥田（1962）に正面から取り組み、みずから実例を収集・整理する中で奥田の分類の問題点を指摘し、〈二格の名詞＋動詞〉の再分類と諸類型の体系化を図った意欲作である。

資料は主に①戦後の小説 11 点、エッセイ 8 点、評論 6 点、計 25 点の最初のページから 50 ページ目まで、②『朝日新聞』2011 年 4 月 13 日～5 月 13 日、計 30 日分の「社説」「天声人語」、の 2 種類である。①・②から 1652 動詞、述べ 6781 例を抽出して分析対象としている (p.10 表 2 に内訳を示す)。(ただし、(イ)慣用的なもの(「～にあたって」「～における」等)、(ロ)「～ことになる/する」、(ハ)動作の外的状況を表すもの(「署内には大勢の巡査がつくえにむかっている」等)は調査対象から除いているという。)このほかに補助資料として『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』(戦後作品のうち、翻訳作品を除く)や辞書・インターネットからの採集例も用いているが、それらは用例数に算入していない。

本論文の構成は全 4 部 8 章である。第 1 部 (第 1 章・第 2 章) は序論、第 2 部 (第 3 章・第 4 章) と第 3 部 (第 5 章・第 6 章) が本論、第 4 部 (第 7 章・第 8 章) が結論に当たる。各章の概要は次のとおりである。

第 1 部「第 1 章 研究の概要」では、本論文の問題意識や研究対象とする二格名詞の範囲、調査資料等が示されている(既述)。

「第 2 章 先行研究および本論文の位置づけ」では、格助詞ニの研究、二格名詞と動詞との関係に関する研究をそれぞれ概観し、それらと異なる研究として連語論研究を位置づけた上で、奥田(1962)や二格を要求する形容詞に関する松本(1979)を概観し、これらの論考に関して従来指摘されている問題点を 3 点に分けて整理する(「体系化」が不十分である点、ガ格名詞を対象としない点、分類の妥当性が明確でない点)。そして本論文の目的を奥田(1962)の再整理と体系化であるとする。

「第 2 部 二格の名詞と動詞からなる連語の分類」では(二格名詞+動詞述語)の組み合わせを、名詞の語彙的意味、そして動詞の語彙的意味・形態(テイル形・テイク形を取っているか否か等)に注目しながら 2 種(「対象的なむすびつき」「規定的なむすびつき」)、12 類に分類する。そして 12 類の連語のうち 6 類についてはさらに 21 小類に細分する。(p.46 に分類の一覧、ならびに奥田説との対応関係が示されている。)そしてその 1 類ごとにその特徴を記述する。ここにおいて著者は、次のようないくつかの新見を示す。

1 「対象的なむすびつき」

- ・ 奥田の「ありかのむすびつき」の下位類として「消失物のありか」を新設する。
- ・ 奥田の「ゆくさきのむすびつき」を「移動のむすびつき」に改称し、下位の小類として「行く先のむすびつき」「着点のむすびつき」を設定する。
- ・ 「対面の相手のむすびつき」を新設し、奥田の「ゆずり相手のむすびつき」「はなし相手のむすびつき」とともに「相手のむすびつき」の下位の小類とする。
- ・ 奥田の「かかわりのむすびつき」「道具のむすびつき」を、「社会的なかかわり」「心理的なかかわり」「関係のむすびつき」に再編する。
- ・ 「受身的なむすびつき」を新設する。

2 「規定的な結びつき」

- ・ 現代語には見られないタイプである奥田の「内容規定の結びつき」を廃止する。

「第 3 部 二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系」では、個別の連語相互の移行・派生の関係を詳細に記述する。そのことをとおして、奥田が「対象的なむすびつき」から

「規定的なむすびつき」への移行・派生関係のみならず、「対象的なむすびつき」における「ありかのむすびつき」を中心とした移行・派生関係に支えられた体系を示す(図16)。

「第4部 結論と今後の課題」では、結論を5項目、今後の課題を3項目列挙する。

【講評】

本論文は、その重要性が意識されていながらも長らく放置されていた奥田(1962)に対して、外部からの批判としてではなく、奥田の連語論の枠組みを正面から継承しつつ内在的に全面的な見直しを図った、恐らく初めての論考である。奥田の議論は、学派内においてはともすれば絶対視され、批判が許されない雰囲気もあった中で、このような論考が書かれたことは、その点だけとってみても学史的意義が認められる。

各委員から指摘のあった、本論文の長所とすべき点を列挙すれば、次のとおりである。

- (1) 「連語論」の独自性を奥田氏以上に明快に説明しつつ、奥田(1962)の不十分な点を的確に指摘している。
- (2) 連語の再整理にあたって、著者みずから数千例の実例を集め、いわばボトムアップ式に連語の再類型化を図っている。そのような地道な作業を行なったことで、第3部における各類型間の連続性・移行関係の網羅的整理が可能になったと言える。
- (3) 連語の各類型を整理する際に、単に動詞と二格名詞の組み合わせだけでなく、動詞がテイル形である際に取る独自の二格名詞や、語彙的受身動詞の取る動作主二格名詞(「受身的なむすびつき」)をもすくいあげている。また、「構造」(ここでは、動詞と2つ以上の名詞項目が構成する文型のこと)を考える際に、奥田が厳格に排除していたガ格名詞をも、その後の論議を検討した上で「必要に応じて」議論に取り込んでいる。著者はこのような一連の態度を「拡大連語論」と称しているが、このような処置は、奥田が「連語」を厳格に語と文の中間に位置づけていた態度から一歩踏み出し、文論に近づいたものであると言えるが、それは二格名詞の用法の広がりにも鑑みて必然的な態度変更であったと言ってよい。なお、著者自身もこの点について自覚的であったことが、口述試験における質疑において確認された。
- (4) 連語諸類型間の相互移行の関係をいくつもの図で分かりやすく示している。(ただし、本文の記述と図における表示との間に不一致があるなど、不十分な点もある。)
- (5) 非母語話者の執筆にしては誤記が非常に少ない。丁寧な校正の跡が見てとれる。

一方で、次のような問題点の指摘があった。

- (1) 「連語論」の独自性を語ってはいらぬものの、そのことの研究史的意義をより意識的に叙述すべきであった。例えば、比較的よく知られた概念である「結合価(valence)」と「連語」との異同を示しながら、「連語」概念の有効性を述べれば、さらに分かりやすくなったと思われる。
- (2) 本論文の新規性・独自性の主張が上手にできていない。例えば、奥田(1962)以外の先行研究への言及がただ言及するに留まっており、本論文がどのような点を一歩進めることになっているのかが明確でない。また、連語諸類型間の「移行」関係が、認知

言語学などで言うプロトタイプからの「拡張」などと同じなのか違うのか、明確に述べられていない。(口述試験での応答では、考え方が異なる旨返答があった。)

- (3) 諸類型間の移行関係は、本論文に言及されているもの以外にもまだあるはずである。「消失物のありか」と「着点のむすびつき」「くっつきのむすびつき」、「受身的なむすびつき」と「感情的な態度のむすびつき」なども考察に取り込むことで、より完成された体系を示すことができたのではないか。
- (4) 著者は論文中で言及していないものの、「ありかのむすびつき」の各小類(「存在物のありか」「内在のむすびつき」等)には、「〇〇に××が{要る/足りない/欠けている/.....}」等といった、不在・欠如に関する述語の例が当然含まれているはずで、その点に意識的であるならば、「消失物のむすびつき」もまた、「着点の結びつき」「くっつきのむすびつき」の「不在・欠如」タイプに解消されることになるだろう。口述試験において、著者もこのような例文に気づいていたことが明らかになった。ただし、こうした例の処置に困って、分類せず用例数からも除いた由であり、この点については研究上不適切な事である旨嚴重に注意した。

ただ、これら個々の問題点も本論文全体の価値を損なうものではないという認識で審査委員の認識は一致している。

2017年7月2日に実施された最終試験では、各審査委員から上記のような様々な好評価や問題点の指摘がなされた。著者李丹氏の返答は、意見を述べるべき点は述べ、不十分な点については審査委員の指摘を率直に受け入れるものであった。最終試験での質疑をもとに、李丹氏みずから改善していこうとする姿勢がうかがわれた。

【総合評価】

学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査委員は全員一致で、本研究が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。

以上